
最後の曲がり角

ATS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の曲がり角

【NZコード】

N4797D

【作者名】

ATS

【あらすじ】

ふといつもとは逆の方向へ曲がってしまう事がある 人間は

自分の意志とは逆の選択をしてしまう瞬間がる。そこに何が待っているのかも知らずに。やり手の営業マン北田は、常に自分のポジションに不満を持っていた。そんな北田はいつもの曲がり角を左に

古ぼけた小道具店で手に入れた紙切れが、サラリーマン北田の人生を左右する。

人は時として、自分の意識とは全く反対の事をする時がある。

それは無意識の中にある本当の気持ちであつたり、抑圧されたストレスから抜け出したいと思う気持ちであつたり……その時のサラリーマン氏も、そんな理由だったのかもしれない。

「は～」

と、30代と思われるサラリーマン氏は、何とも無しにため息をついた。

サラリーマン氏の名前は北田と言ひつ。

北田は都内の商社に勤める営業の係長で、仕事が出来ると評判の男だった。

何せ20代の半ばで係長に昇進し、その後も順調に成績を伸ばしては、社の業績をドンドンと上げてきたからだ。

誰もが、次の課長になるのは北田だと思うのが当然と言つべからん、北田は有望な存在であつた……しかし現実には、北田は既に30代も後半にならうとしていたのだが、未だに課長の椅子には座れずにいた。

何か仕事で大きな失敗でもしたのだろうか？

いや違う。小さな失敗はあつたとしても、彼の業績は課長の椅子に座るには十分過ぎる程の働きを見せ、営業部の中で彼に列ぶ者はいなかつた。

ではどうして未だに昇進が出来なかつたのだろうか？

話は簡単である　　そう、前が詰まっていたからだつた。

北田の直属の上司である課長は、バリバリのやり手でも無ければ優秀な管理能力がある訳でもなかつた。

しかし、北田が勤める商社は、現社長が一代で築き上げ、その周

団を親族で固めていいると言う親族経営の見本の様な会社で、課長は遠縁とは言え社長の親類だったのだ。

そして不幸な事に、その課長の年齢は北田とほぼ同じ。つまりは、何か突發的な事故や病氣にでもならない限り、その席が空くことは望めないと言う状況だったのである。

「仕事も給料も良いが、先が見えない……」

北田がため息をついたのはその為だった。

北田は、勤め先から1時間30分の電車を乗り継ぎ、やっと購入した我が家のある駅を降り立つと、吹き付ける風の冷たさに顔をしかめた。

「寒いなチクショウ」

季節は晩秋を過ぎて初冬の時期になり、このところの寒さは本格的な冬の訪れを告げる様になつて、夜になると一層寒さが増して身に堪えた。

この辺は未だ周囲に多くの自然が残つていて、都心の様にビル風はないものの、冷え込むのが激しい田舎街。電車から降りた北田が顔をしかめるのも当然だった。

どうしてこんな所に家を買つちまつたんだろう。 北田はこの駅に降り立つと、いつも後悔の念にさいなまれる。

しかしどうしようもなかつたのだ、アイツもあの頃は可愛かつたんだ……北田は、今からは想像も出来ないほどに可愛かつた、結婚当時の妻の姿を思い出していた。

結婚するときの条件として、妻の実家に近い所に家を建てると言う条件があつた。だからこんな所に家を建てたのに……今まで後悔の方が大きい。

それでも当初は、順次開発が進んで大型のショッピングモールなどもでき、バスなどの交通機関も良くなると言つ触れ込みだつたので安心していたのだ。

ところがである、開発していた企業が倒産してしまい、「順次」と言つて言葉が形骸化すると、駅周辺はまだしも北田の家の周辺は未だに少し寂しさが残つてゐる様な状態で、いつになつても開発される見通しがなかつた。

北田がバスの時刻表を見るまでも無く　　とつゝの昔に終バスは終わつてゐるのだ　　タクシーにでも乗つて帰ろうかと乗り場の方を見るが、そこには、同じ様な考え方の人達で行列が出来ていた。

「これでは何分待つか解らないな」

北田はこの寒さの中でタクシーを待つよりは、歩いていた方が幾分かは良いだらうと思い、12分と言つ道のりを歩いて帰る事にした。

「タクシー代も馬鹿にならないしな」

そうつぶやくと、もう一つため息をしてから歩き出すのだった。

「君をこのままこなしておかないよ」

30になつた頃から言われていた言葉であつたが、果たして40になるまでにその言葉が現実になるのか　　北田には解らなかつた。

「つたぐ、いつまでこのままでいなくちゃならないんだ！」

と、愚痴つて見たところで、この年になつて自分が他の会社へ移る事も考えられず、給料は良いから　　と、随分昔から自分を納得させる事にしていた。

もつとも、最近は給料の方もあまり良くなは無かつたのだが……
そしてため息である。

「はあ……」

変わらぬ自分の役職の事を思つと、自然、ため息がでてしまつのである。

北田はふと顔をあげると、いつもと変わらぬ100ほど直線が続く道まで来ていた。

そう、いつも口でため息をつき、顔をあげると直線が見えるん

だ……後はこのまま100mほど真っ直ぐすすみ、突き当たりを右に曲がつて2分も歩けば自分の家に帰り着く。

北田はいつも、この道の手前でこの事を考えていた。

100mも続く直線が自分の昇進の道の様に思えていた頃は、この道のりも軽いものであったのだが、昇進が絶望的になると、見通しの良い道が何とも長く、そして昇進できない自分を皮肉っているかの様に感じられて嫌気がさす。

その日も北田は、見通しの良いその道を重い足取りで突き当たりまで歩いた。

「この道を右に……この道を右に……ね」

毎日の様にこの道を通りているのだから、何も考えなくとも右に曲がる事は分かつていたのだが、北田は無意識のうちに頭の中で繰り返しながら、T道路へとさしかかった。

しかしこの時、どうしたものか、北田は自分でも全く訳の分からぬ行動にでた。北田の足が自分の意識とは全く逆の、まるで自らの運命にさせやかな抵抗を試みたいかのよつこ『左の方向』へと向かって歩き出したのだった。

何をやっているんだ俺は？　北田は自分の取った行動に自らが混乱していた。

自分の家に帰るには、反対側に曲がらなくてはならない　　そ
うだよ、なんで好きこのんで遠回りなんかしなきゃいけないんだ。
それに俺はこっちの方向なんか来たこともないんだ。迷子にでもな
つたら笑い者になっちまつ。

そう、北田は家を買ってからと書つもの、ゆつくりと自分の家の周囲などを歩いたことは無かつたのである。

早出残業などは当たり前。

接待の付き合いで遅くなれば、ビジネスホテルに泊まることもしばしば。それにしたつてホテルに泊まれればそれでも良いが、最近

はそのホテル代も会社が負担してくれない事もあって、会社の仮眠室 とは言つてもソファーアーがあるだけの所で眠る事も多くなつてきた。

しかも、家にいれば女房からは「ビ」か遊びにでも行つた? 「などと言われる始末。

今日も家に帰つたところで晩飯が用意されている訳もなく、女房なんかは絶対に先に寝てゐるに違ひ無い 北田はいつにも無く怒りがこみ上げてきた。

「何が経費削減だ! 僕は知つてるんだ、課長が家を買う時に社内の住宅融資限度額を大幅に超えて借り、それに金利だつてほとんど払つていないつて事ぐらい」

冬の寒さがそつ思わせるのか、今日の北田の愚痴はいつもより尾を引いた。

「そうさ、あの課長さえいなければ、僕が課長になつてるんだ。会社にだつてその方が良いに決まつてゐじやないか! たかが社長の親類つてだけで課長になりやがつて……」

と、今までずっと思つていたことを、改めて口に出しては見たものの

「はあ~」

最後にはため息に変わるばかりである。

そう、やはりこの状況から抜け出せる可能性が、ほほ無じことを見ついているあきらめのため息だった。

「もどるか」
北田がもう一度ため息をつき、自分がだいぶ家とは反対の方向へと歩いてきてしまった事を思い出した。
どうして俺はこんな方へ歩いてきちまつたんだろう……

帰りの道のりを考えてさらに気が重くなつたが、明日も早起きで熱い風呂に入つて体を休めたい 北田はそつ思つ

と、踵を返そうとした。

すると「お待ち」と、古い一軒家の中から低い声が聞こえてきた。北田は驚いてその声の方へ目を向けると、そこには一軒の古ぼけた骨董屋らしい店が開いていた。

なんでこんな夜中に開いてるんだ？

北田は不思議とそんな事を思つよりも、何故か解らないがこの古ぼけた骨董屋に強烈に興味を惹かれていた。そう、熱い風呂の事なども忘れてしまつくらいに。

そして北田は、店の中に入る事を選んでいたのであつた。

北田が店内に入ると、古本屋の様なむつとした埃臭さを感じたが、直ぐに慣れるごと、カウンターの向こう側にいる一人の老婆に気が付いた。

「おばあさん、俺のこと呼んだかい？」

北田は恐る恐る声を掛けていた。

「ああ、呼んだよ。あんたがあんまりにも愚痴ばかりつぶやいてるんでね」

その老婆は北田の事を見つめると、せり

「どうやら仕事に付いての悩みらしいけど、どうしたんだい」と聞こってきた。

なんだこの婆さんは？

北田は一瞬この老婆の事をつぶやかれて目で眺めた。

「お前さんがうさんくさく思つのはもつともだよ。だけど、それで昇進の事が解決する訳じゃ無いだら」

北田の考えを読みとつたかのように老婆は言つ。

「ど、どうして俺が昇進の事で悩んでるって解つたんだい？」

「そんな事はどうでも良こよ。ただね、お前さんの悩みを解決出来るモノがここにある。どうだね、話を聞いてみるかい」

北田はその老婆の言葉を信じてはいなかつた。

結局、宗教か何かで高いモノでも買わされるんだろう。世間にはそんな商売をしているヤツがたくさん居るんだ
北田はそう思ひ、黙つてこの店から出ようと考えた。

しかし、そんな考えの北田の口からは「そのモノって言つのは？」と、聞いていたのであつた。

「ありがとよ」

北田は老婆の声を背に店を出ると、三枚のお札の様な紙切れを手にしていた。

「この紙に自分の周りから遠ざけて欲しい人間の名前を書くと、本当にその人間がお前さんの前から消えるんだよ」老婆はそつ言いながら、鈍く笑つた。

「これにお前さんの昇進に邪魔になっている人間の名前を書けば、お前さんの前から遠ざかり、昇進の可能性を手に入れる事が出来るんだよ」

そんな馬鹿な……北田はそう思いながらも、まるで催眠術にかつたかの様に老婆のこの言葉が頭から離れなかつた。

でも、もし本当なら？

そうだよ、あの課長さえ俺の前から消えてくれたら、俺の昇進は間違いないんだ……だけど、相手を呪い殺すとでも言つのか？

北田は別に信心深い訳ではなかつたが、ふと心配になつた。

すると、またもや北田の心を見透かしたように老婆は語る。

「別に相手が死ぬ訳じやないさ。ただ、きつかけを与えるだけの話だよ」

「きつかけ？」

「そうさ、いつかはそういうハズだつた……そんな事を、少しだけ早くするだけさ。これは呪いとかつて言つもんじやないのさ」

「ほ、本当かい？」

「ああ、だけど、その人が自分から遠ざかつたからつて、昇進でき

るつて保証はどこにもないがね

「そ、それは大丈夫だ！俺は部長になつたつて可笑しくないんだ！」

北田は思わず声が高くなつた。

「じゃあ買ってみるかい」

老婆は北田の目を見つめながら聞いてきた。

まるで、今までの不満を全て見透かすような不思議な視線で、北田は田をそらせずに、ただただうなづくだけだったのだ。

「ただいま……」

北田は鍵を開けると、つぶやくような小さい声で言った。

別に女房が起きている訳でもなし、大きな声で起こしでもしたら嫌な顔をするのに決まっている。それでも北田がただいまと言うのは、自分の家に帰ってきたと言つ実感を確かめる為に出しているだけだった。

そしていつもは、熱い風呂へ入るために背広を脱ぎ、浴室へと向かうハズだったのだが、今日の北田の行動は少し違うものになつた。北田は急いで自分の書斎……田舎に家を購入したので、書斎だけはなんとしても造りたいと思った。田舎に入り、鍵をしめたのだ。この前この書斎に入ったのはいつだったのか、北田自身にも解らない程に仕事の方が忙しかつたのだが、以外と埃の無い椅子に座ると鞄の中から三枚の紙切れをとりだした。

馬鹿なものを買つてしまつたものだ。北田は書斎の椅子に腰を掛けると、少し冷静になつたのか、手にした紙切れを身ながらつぶやいた。

普段の自分ならば絶対に購入しないであろうもしなかつた思いがこみ上げてくる。

しかし、北田は分かっていた……そう、きっと自分がこの紙切れに、ある人物の名前を書き込む事を。

「俺はどうしても昇進したいんだ！！」

北田の胸に渦巻く思いは、今置かれている自分の環境が重く、そして大きくさせている。決して安くないこのお札を老婆から買ったのは、そんな決意のものだつた。

北田は普段はあまり使わない高級な万年筆　　係長昇進の記念に購入したもの　　を机の引き出しから取り出すと、インクの出を確かめてからペンを進めるのだった……

北田が通う会社へは地下鉄で行くのだが、駅からは5分ほどの所にある。

駅の地下道を抜け、地上へ出てからまっすぐ30Mほどすすみ、一つ目の角を曲がると右手に会社のビルが現れる。

北田はいつもの様にその道のりを進みながら、昨日の事を考えていた。

馬鹿なものを

結局、あの紙に課長の名前を書いては見たものの、時間が経つと馬鹿馬鹿しいという思いが強くなり、北田は本格的に後悔するようになつていた。

「あんなおどき話が実際にあるわけないじゃないか」

北田は会社に近づくにつれ、その足取りが重くなる。ふと見上げれば、いつもと変わらない会社のドアが待ちかまえていた。

「なんですか？」

北田は思わず声が大きくなつていた。

「本当なんですか部長？」

「ああ本当だ。何でも田舎に引っ込んだ両親の面倒を見るために、

支社への転勤を望み、それが受理されたらしい」

北田は部長から聞かされた話に、狂喜したい気持ちを抑えるのに

苦労しながら

「そうですか、『両親の面倒を見なければならぬのは大変でしょうね』

と、もっともらしい顔を作った。

なんて事だ！！俺の、俺の昇進の道が開けたんだ！！！

外回りに出ると、北田はまるで足に羽が着いたかのような軽やかな気持ちだった。

そう、北田の上司であった課長が、実家に残してきた両親が年を取り、もうそろそろ面倒を見なければならぬと言つ理由から、実家の近くの支社へと転勤を希望して受理されたのだった。

そして

「翌日付けで、正式な辞令が出るだろ？君の実力なら当然だ」「ついぞ長く待ち望んだ言葉を聞き、北田は本当に狂喜乱舞しそうになつた。

「やつたぞ！！俺はやつと昇進できるんだ！！」

何度もこの言葉を叫びそつになつたか解らなかつた。

いつものあの重い足取りが嘘のように、軽やかに家路に付くことも出来た。

「おー、やつたぞ！」

……この日、自分の女房と久しぶりに顔を合わせた北田は、まるで係長に成り立ての頃のようにはしゃいで、妻から「大丈夫かしら、このひと」と思われたのは、本人には気が付くはずも無かつた。

一ヶ月後

昇進が現実のモノとなり、北田の方も課長と言つポジションに慣

れてきた。

「いや、実質的に、俺は課長と代わらなかつたんだ」

実際今までにも、北田は前の無能だった課長の代わりを随分やつてきていたので違和感無く仕事にとけ込めていた。

「本来、俺の能力なら部長の椅子を狙つたつて可笑しくない！」

北田は課長になつてからも順調に成績を伸ばしており、自分自身もその結果に満足が行くモノだつた。

すると、もう一つ先のモノが欲しくなる。

そう、部長の椅子を狙いたくなつていたのだ。

もちろん、まだ年齢的には若いと思われるかも知れないが、北田の実力からしてみれば、部長と言うポストを狙うのに十分だつたのだから当然と言えば当然の欲望である。

少し早いが、あの紙をもう一度使ってみようか？

一ヶ月前に課長になつたばかりで直ぐに部長職に昇進できる不安だつたが、なまじ道が開けた事によつて、どうしてももう一つ上のポジションが欲しくなる。

そうだよ、俺の実力ならば絶対に大丈夫に決まつてゐる 北田は飲みかけの珈琲を一気にあけると、既にその決意は固まつっていた。

北田は期待と不安の相半ばする感情に支配されながら、いつもの角を曲がつて会社へと急いでいた。

本当にあの部長が職を退くのだろうか？ 北田は、昨日あんなにも自信を持つておれに部長の名前を書いたのだが、よくよく考えてみると、今回ばかりは無理な様な気がしてきた。

部長の家は会社から30分もしない所にあつて両親とも同居だし、それに無能だった課長と違い、部長は仕事に関しては出来る方である。

もつとも、部長になるくらいだから、出来て当然ではあるのだが。

あれこれと考えているうちに、不安の方が勝つべきそだつたが、結論が出る前に会社へとたどり着き、その手で扉を……開けた。

「部長はまだ来て無いのかい？」

北田は部長がまだ出社していない事に気が付いた　いつもなら必ず俺の前には出社していたのに……まさか、やはり！

北田がお札の効力だ！と思つたその時

「北田君、ちょっと来てくれないか」と、声がかかつた。

北田が振り返ると、そこには

「しゃ、社長」

声の主は、社長だった。

「それでは使い込みがそんな額に？」

社の主立つた重役が集まつた席に北田も呼ばれて、そこで聞かされたのは衝撃的なものだった。

「うむ、調査しただけでもこれだけ出てきた。女を囲つていたらしくてな、実際にはもつと女の方に金が流れていると言つことだ……」

北田の上司だった部長は、会社の金を流用して愛人を囲い、その額は2000万を越えるモノになつていたのだが、それが昨日の夜に発覚したのだった。

結局、会社のイメージを保つために告訴までは行かなかつたモノの、部長は解雇され、全額返済のローンを組む事で決着が付いたらしい。

「そうさ、いつかはそういうハズだつた……そんな事を、少しだけ早くするだけだ」　　北田の頭の中に、あの老婆の言葉が浮かんだ。

確かにそうだ、別に俺がどうこうする必要も無く、いつかはこうなるハズだった事が早まつただけなんだ……これで俺は部長になれるんだ！

「それでだ、営業部の部長の件だが……」

北田は「」まで来ると、自分の昇進の事を信じて疑わなかつた。
社長のこの言葉をどれ程待ちわびたか解らなかつた。

「北田君は課長になつて間もない事もあり、今回は人事部の部長を営業部へ回し、人事課長を部長に昇進させようと思う。まあ、確かに人事から営業などと回る事は珍しいかも知れないが、課長の北田君は出来る人間だ。色々とフォローしてくれるだろう」

!!!

北田は耳を疑つた。

何故だ！この俺以外のヤツがなんで部長の椅子に座るんだ！！
後頭部をハンマーで殴られたかの様な感覚に、一瞬目の前が暗くなる。

しかし、「」で取り乱しては次の機会が無いかも知れないと思うと、最後の希望だけを頼りに何とか最後まで理性を保つことが出来た。

「北田君、色々とフォローを頼むよ」

人事部長だつた男が手を握り、にこやかに笑うのを見て

そ

うだ、こいつも親類だつたんだ……と、北田は気が付いた。

「なんだつて言うんだ！！」
　　帰り道、何度北田がこの言葉を吐いたか解らなかつた。

なんで人事部から営業へと回つてくるんだ！また俺は新しい部長の尻拭いばかりやらされて、それで終わるのか！！

やりきれない思いばかりが、胸に、大きく広がつていた。

営業も人事部にしても、先がだいぶ詰まつている状態である事は知つていた。

人事部は社長の親族で固められた部署である。だから、人事部の部長を営業部へと転属させて、人事部の下の人間を一つずつ昇進さ

せたかったのだろう。

北田の中には、またもややりきれない感情で支配されかけた……が、しかし

「あのお札で今度の部長を」
だが、また他の部署から新しい部長が来たら? もう、残りのお札は一枚しかない。今度失敗したら次は無いかも知れない……北田はそう思うとどうしても踏み切れなかつた。

「そうだ! あの老婆から、また新しいお札を買えば良いんだ。そうすれば、何度でも俺の昇進の邪魔者を排除する事が出来る」

北田が単純な解決策に気が付くと、あの直線の突き当たりを、今度は自分の意志で左へと曲がっていた。

「無いよ」

その言葉に北田は愕然とした。

「無いって……頼むよ婆さん。俺はどうしてもアレが必要なんだよ」「無いモノは無いんだ、しょうがないだろ」「だつて、後一人だけじゃ確実じゃないんだ。俺の昇進に邪魔なヤツはもうともと隠れているに違いないんだ!!」

北田は悲痛な面もちで老婆へと迫つていた。

「そつかい、それは大変だね……それなら良い」と教えてやるよ。本当ならこんな使い方はいけないんだけどねえ」

そう言つと老婆は、ジロリと北田の事を見つめながら話を続けた。「お札には名前を書くのが本来の使い方だけど、それだけじゃなく、条件を指定する事でもその願いが叶うんだよ。例えば……お前さんが望んでいる様に『自分の昇進の邪魔になる者全て』と言つ条件でもね……」

その言葉を聞いた北田は、一気に目の前の霧が晴れた気がして「本当に婆さん!」と、声を上げていた。

「ああ、本當だよ……ただ、『よく考えて』使つことだね」喜びの表情を浮かべる北田を見て老婆はつぶやくように言つのだ

が、喜びの方が大きい今の北田には聞こえない。

「ありがとう婆さん」

喜々とした面もちで、北田は帰つていったのだった。

やつたぞ！俺にはまだ運が残つてたんだ！！ 北田は興奮する気持ちを抑えようともせず、家に帰る途中、『俺の昇進に邪魔になる者』と言つ言葉を繰り返す。

翌朝、いつもならば布団から起き出すのにだいぶ労力を要するのに、今日の北田に取つては待ち遠しいものとなつていた。

「俺の昇進が確実になるんだ！！」

結局お札に書いた文面は『俺の昇進に邪魔になる者全て』だった。親族経営の会社では、どこから横やりを入れられるか判らないから、この様な文面になつた。

いつ昇進できるのか？と言つ、ヤキモキした思いで過ごすのも今日が最後だと思つと、北田の疲れはどこかに吹つ飛んでしまう。そんな北田は、普段と変わらない時刻の電車だつたが、家を出るのが早かつたのかホームで少し待つと言う余裕も味わつていた。
「昇進するのがこんなにも俺の力になるのかーこれからはもっと業績を上げてやるぞ！！」

昇進を信じて疑わない、いや確実のものと思つてゐる北田は、いつも道のりを軽やかな足取りで進んでいくのだった。

前述の通り、北田の会社は電車を降り、地下道を抜けて地上に出てから30mほど直進して、一つ目の角を右に曲がると右手に見えてくる。

つい最近まで、この角を曲がるのが億劫だった俺が嘘のようだ

北田は重い足取りでこの道を歩いていた時を思い出してた。

親類だかなんだか知らないが、実力も無いヤツが上に居るなんておかしかつたんだ。俺が部長の席に座るのだって、本来座るべき所に座るだけなんだよ……『当然だ』そうは思っていても、北田の顔からは笑顔が消えて無くなることは無かつた。

「さて、この角を右に曲がつたら直ぐだ。直ぐそこに俺の部長への道が待つていいんだ……」

会社へ向かう最後の曲がり角が見えると、だんだんと興奮の度合いが増して足取りも速くなり、競うように角を曲がる。

「ん？」

すると何やら、会社の前で人だかりが出来て、いるのが目に入った。

「何をやっているんだ？」

北田は、今度は訳が分からず、足取りが速くなつた。

「どうしたんだ？」

北田は自分の部下の顔を見つけて声を掛けた。

「あつ、北田課長！！」

心なしか表情が青ざめている。そんな表情に不安になつた北田が「一体何だ？ どうして扉が開いてない？」と質問した。

そんな北田の質問が耳に入つてはいたのだろう、しかし、部下であるその男は自らもどうして良いか判らないと言つた風に、ドアに張り付けてある一枚の紙切れを指さすのがだけが精一杯だった。

「あの紙がどうした？」

北田は部下が指さした一枚の紙を見るために、多くのうなだれている社員の中をかき分けていった。

そして会社のドアに貼つてある紙を見た。

当社は倒産しました。なおこの建物は債権者の断りも無く……

そう、北田の昇進の邪魔になる者「全て」とは、親族経営の多い会社のほとんどの重役の事をさす。しかも、他の社員にしても邪魔にならない可能性は0%とは言えない。

つまり、北田の邪魔者が全ていなくなるのは、会社が無くなるしか無かったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4797d/>

最後の曲がり角

2010年10月8日15時10分発行